

<研究ノート>

市町村博物館と子供教育

千葉 隆司*

Municipality Museum and Child Education for Better Humanity Education

Takashi CHIBA *

抄 録

子供がよりよく成長するには、当然のことながら家庭・社会・学校の教育がバランスよく相補われる関係にあることが重要となる。古来、日本人は生まれ、育つ地域の中で日常生活に必要な知識や技術を家族以外の方々にも教育され、習得する環境にあり、家庭・社会・学校の教育がほどよくバランスを保っていた。そこに子供たちは「生きる力」を自然と身につけ、様々な人生の困難な状況にも対応できる力となっていたのである。しかし、個人の尊厳が重視されていく中で、地域社会において重要であったコミュニティが崩壊しつつある現在、子供たちの「生きる力」を育む教育は弱体化していったと言わざるを得ない。こうした状況を見直すきっかけづくりが各地の博物館で行われている。その一つの事例としてかすみがうら市郷土資料館で実施している「親子古代米づくり教室」を紹介する。「親子古代米づくり教室」は、機械化される以前のコメ作りに焦点をあて、1年間通じた農作業を親子一緒に行う教室である。コメ作りの作業を親子で実施し、共に考え、互いに学び、協力し合い、絆を深め、他校の友達や地域の多くの異世代との交流をすることで、子供たちは古来の家庭・社会・学校のバランスのとれた教育を体感し、より良い「生きる力」を育てている。小論は、こうした子供教育に有効と考える農業からの家庭・社会教育、それを実施する市町村博物館について紹介し、今後の博物館における子供教育についてのあり方を模索したものである。

キーワード：市町村博物館、子供教育、生きる力、親子学習、体験教室、米作り、異世代交流

1. はじめに

生涯教育の時代となり、学校教育に止まらない、年齢層に応じた教育の重要性が叫ばれるようになった。その中でも、やはり子供の教育は人生を左右するものとして重視され

る。学校教育が制度化されている所以である。しかしながら、学校教育以外に子供教育の理念や目的が問いただされ、実践される機会はまだまだ少ないものと感じる。以前に地域が多くなる子供教育を担った状況が薄れ、子供が地域から学び、多くの「生きる力」を育む

* 経営情報学部経営情報学科、Tsukuba Gakuin University

きめこまやかな機会が少なくなっている背景が影響しているものと考えられる。そうした中で、社会教育の中核を担う博物館の活動は重要なものといえ、近年は多くの博物館で子供を対象にした教育普及活動が活発になってきている。特に、自らが生まれ育ち、義務教育を受ける地域となる郷土に所在する博物館、いわゆる市町村博物館の子供教育に対する役割は重要なものといえる。最も身近で地域に根ざす社会教育施設であり、同じ郷土に生活する人とのコミュニティにより成り立つ多くの事業から、子供の時期に育まれるより良い基本的な人間性までも学ぶことができるからである。本稿では、こうした視点に立ち、市町村博物館の事例に基づきながら子供教育における市町村博物館の役割とその重要性を紹介してみたいと思う。

2. 子供をめぐる教育環境

人生を考える上で、それぞれ段階的な時期の名称として、幼児期・児童期・青年期・成人期などがあるが、大きく捉えて成人期に達するまでを子供とすることに異論はなからう。子供が大人になるとは、どのような変化・発達をいうのであろうか。大きな問題点では、あるが少し整理しておきたい。

近代化を迎えるまでの日本社会では、ムラなる共同体の中で一人前の人間として認められることが子供から大人への変化となっていた。この背景にはイエ・一族が重視される地域社会のなかで、一人の人間がもつ役割とその位置づけが重要なものとなっており、一人前となるため家族や子供たちを取り巻く人々によって生活上必要不可欠な知識や技能が教育されていたのである。つまり家族や子供たちが生まれ育つ地域社会から、日々の生活に関わる教育を受けていくシステムが子供たちへの教育の中心となって存在し、子供が大人へと成長していったのである。こうした教

育環境が、近現代社会へ移行するにつれ変化していくようになり、生活のための教育や学習内容から学校教育による教科中心の教育内容へと変化していき、その方向性は現在にも引き継がれている。

小学校学習指導要領（平成20年3月告示）第1章総則の第1教育課程編成の一般方針の中には、「学校の教育活動を進めるに当たっては、各学校において、児童に生きる力をはぐくむことを目指し」とある。子供の教育とは、言うまでもなく「生きる力をはぐくむ」ことが重要となる。この「生きる力」とは、いかなるものであろうか。人間として命ある限り、生活していくためのより良い思考力・行動力と考える。人生の中で遭遇する様々な場面の中で「生きる力」は発揮され、人それぞれの生き方につながっていくのである。「生きる力」の強弱や内容は、子供時代の経験や体験の積み重ねによってつくられると考えられる。いわゆる、子供時代に人生の基礎的・基本的な要素がある程度決定されてしまうと思われる。

そのため、当然のことながら子供をめぐる教育環境は重要なものとなる。子供の教育環境は家庭・社会・学校教育がバランスよく保たれることでより良いものとなりえる。子供たちは、家庭や生まれ育つ地域社会において、様々な生活様式や習慣を身につける中で、段階的な集団組織の成員として発達していった。さらには、発達する過程に所在する諸条件や環境によって、その場面ごとに遭遇する事象に対し、子供たちの思考力・行動力を駆使する能力は変化にとんでいく。加えて、子供たちは知らずと将来的なキャリアデザインの下地まで、この時期に形成していくことになる。

このように変化してきた子供教育の中で現代社会に問題となるのが、家庭と社会教育の充実である。かつての日本における地域には、前述した内容のとおり擬制的な家庭環境とな

る地域社会が存在していた。地域では、実の親以外にも子供たちに目を配り、養育するような住民意識がみられていたが、そうした地域の大人たちの意識が薄れはじめ、地域における本来の社会教育システムが崩壊していったのである。

一方で共働きが一般的となり、生まれて間もなく保育所とのかかわりをもつ家庭が増加する昨今、両親共に子育てを十分に経験しないまま子供が成長していく現象がみられる。子育ては親育てにつながり、親子のスキンシップ・コミュニケーションなどを通し、子供は感情や自己コントロール能力、価値観など、親はいとおしいと思う心、家族と共に生き、守るという心情など親子ともども育まれるものが存在するのである。子育て・親育ては、子供教育に必要な不可欠、かつ重要な家庭教育の一環なのである。

このように子供教育において、家庭、社会共に未熟となった現在、その充実を他の教育環境や組織・体制に求めざるを得ない状況にあるのである。

3. 地域における子供教育

前述したように、かつての子供教育は日常生活の中での教育・学習が特徴であった。それらは、親をはじめとした地域の大人たちと共に行動することで、生活に必要な知識や技術そして、現実的・実践的なものが伝えられ、時には見よう見まねで習得され、一人前の大人として仲間入りし、地域社会の一員として認識されるのが一般的な流れであった。つまり一人前になるとは「生きる力」の習得の度合いによって認識された。親が実践する農作業や漁業といった生業や住まいの管理、食事の方法、衣服の製作や修繕方法といった家事にまつわる事、地域の行事や慣習システムなどについて習得し実践していくことが「生きる」ということにつながっていたのである。

それが、近代になるにつれ、西洋教育の思想が導入されていき、生活の中での教育・学習は希薄化していった。学校教育への比重は大きくなる一方で、それは個の自由や自立を重視する内容であった。教育基本法の冒頭には、「われらは、個人の尊厳を重んじ」、第一条（教育の目的）には「個人の価値をたつとび」などとあり、文部科学省委託「地域の教育力に関する実態調査」（平成18年）での「地域の教育力に関する意識」に対しては「以前に比べて低下している」と回答した方は、全体の55.6%と過半数以上となり、その最も大きな理由として「個人主義が浸透してきているので（他人の関与を歓迎しない）」ことが指摘されている。いわゆる社会全体が、個人主義を美徳として推進する中で、それまで一般的に存在していた地域の教育力までも、希薄化させてしまう世の中となってしまったのである。

一方で古来の地域社会では、日常生活での関わりや各家庭のライフサイクルの中で協力し合い、助け合う姿が少なからず存在していた。第一次産業が主流を占めていた時代は、農作業の協力体制として「ヨイ」というものがあつた。「ヨイ」では、農作業の遅れなどを近所づきあいの中で協力を求め、逆に「ヨイガエシ」といって協力していただいた分は後ほど肉体労働をして、お返しをするというものであつた。また、葬送に関しても葬式組（十人組）が形成され、「知らせ」という亡くなった方の連絡にはじまり、葬式や野辺送りにいたる行事にも地域社会の相互扶助の精神が大きく働いていたのである。こうした状況の地域社会に子供たちは、助け合い、協力し合う生き方を学びながら、周辺に広がる自然環境や家族を越えた同郷における地域集団との関わりの空間、地域の行事や慣習に参加し、協力・勤労を通して、社会生活上において必要な知識や技術を習得していたのである。

4. 市町村博物館の子供教育－親子古代米づくり教室の事例から－

以上のような社会における子供教育のあり方について私なりに考え、実践した事例を紹介する。私は農業、中でもコメ作りが現代社会における子供教育に効果的な教育と考えている。全国的に学校水田や学校農園、あるいは地域のNPOやボランティア団体による農業教育が盛んに実施されていることも、多くの方々が効果的な教育内容と捉えている所以であろう。コメ作りは、全国一般的にみられる基幹産業であるため、日本文化の基盤となる情報に加え、地域の身近な情報を数多く内包している。また、農業指導において地域を熟知した地域の方々と関わりをもつ機会が多くあることで、子供たちとの地域コミュニケーションも深みを増す。何しろ食料となるものを精魂込めて自ら育て、食するといった行為は、「生きる力」には欠かせない知識と経験になるのである。極端な例であるが、『今昔物語』巻26にある10代前半の兄弟が、南海の孤島に漂着し、自らの力をもって米作りにあたり、新田を増やしながら生活していく姿は、生きる力としての力強さを感じ得ずにはいられないものであり、こうした知識・技術は本来人間が持つべく重要な生きる力というべきものである。

かすみがうら市郷土資料館が実施する「親子古代米づくり教室」は、休耕田を利用し、かすみがうら市内小学校13校約1500名の小学生から、親子20組程度約50名（参加者の兄弟や父母両方も参加する場合もある）を募集し、年間7回のカリキュラムで実施している教育普及事業である。平成13年度から始めた教室は、すでに10年を経過し、教室を卒業した小学生は、数百人を数える。親子で参加することにも意義を見出し、親子共通の食に関わる年間を通じた体験から間接的な家庭教育の促進も考慮している。かすみがうら市は、

霞ヶ浦から筑波山麓にかけての位置に属するため、湖の沿岸部や山麓の地域では一般的に水田・陸田がみられるが、常磐線神立駅周辺は新興住宅地となるため田畑の環境にないという状況にある。参加するほとんどの小学生親子は、やはり田畑に縁遠く経験する環境に無いこれらの地域の市民で、生活する環境によって米作りに関する好奇心や関心の度合いの明確な意識の差異が表れているものと感じる。

4月に新学期が始まり、そして行政の年度初めが4月であるため、それ以前に行われる田んぼ作業、田うないや代掻き・苗づくりなどは実施できなく、5月初旬頃に行われる「田植え」からの開校となる。初回の「田植え」では、年間スケジュールや郷土資料館において米作りを実施する意義などを話し、田植え作業に入る。田植えでは、まず直線的に植えていくための基準線を引くため、自家製の大型線引きで水田内の泥底に線を引いていく。その後、親子共々使い古した靴下あるいは裸足で田んぼに入ってもらい、苗を植えていく作業を行う。田植えの方法については、当館に所属する民俗資料調査員や当館を支援する市民団体の市民学芸員の会の地域住民の方々によって直接指導がなされ、全くの初めての小学生親子でも気軽に体験できるものとなっている。田んぼの泥の感触や温度に驚きながら、苗箱から田んぼに投げ入れられた10cmほどに成長した苗を適量分植えていくのであるが、実際に植える分量と泥の中へ植え込む深度、さらに植えていく方向や間隔などの指導を地域住民とのコミュニケーションをとりながら受けていく。この時今まで知りえる機会のない知識や経験したことのない作業を楽しみ、さらなる知的好奇心が芽生える瞬間を毎年、参加する小学生親子を見ながら感じている。最後に、一年間の苗の生育状況や自然環境の様子などを記録するための「観察ファイル」を配布し、使用方法や注意すべ

き点を話し終了となる。観察ファイルは、観察した日の天気情報、田んぼのどのあたりで何の観察を行ったのか、稲の成長は前回と比較しどのあたりが、どの程度成長したか、田んぼの周辺では、どのような植物や昆虫などがみられるのか、観察すべきポイントや現在の稲の生育状況など最低限の指導すべき内容以外は、参加者が自らの視点で主体性をもって観察するシステムをとっている。参加する子供たちは、親と共に田んぼというフィールドにおいて、思い思いの見方をし、疑問点を見出し、コミュニケーションをとりながら観察ファイルを充実させていっている。ここには共に考えるという言動の中に親子の強い絆が育まれる機会を想定している。

6月に実施される第2回目は、一年間のコマ作りでの作業や稲作がもたらした日本文化についてビデオ学習し、今後どのような作業を経て実りの秋を迎えるのか、身近な行事や祭礼も米作りと関連していることなどについて親子共々理解を深めていただいている。その後、当館で所蔵する農具や生活道具などの民俗資料を現在も農業に従事する市民学芸員の会の方々に解説と共に思い出を語っていただき、使い方や楽しかった事、苦しかった事などを伝える機会を設けている。館内での学習の後は、水田での観察会となり、1か月後の苗の生育の様子に加え、田んぼの周りの植物や昆虫など、自らが関心をもったことについて主体的に観察ファイルへ記録をとっていただくよう心掛けています。

7月の第3回目は、雑草抜き及び幼穂形成の様子の観察となる。教室では、水管理や雑草抜きに関しては、参加者及び市民学芸員の会の方々が実施しているが、その他雑草が生えにくい工夫を地域の方々にお願いしている。幼穂観察は、稲の生育を学ぶには絶好の機会といえ、参加者親子が稲の成長の仕組みについて感動をもって観察している様子が分かる。さらに、天候を見ながらの水管理

の状況やこの時期に注意しなければならない点などを指導者には解説いただいている。一方で、田んぼにはザリガニ・カエル・タニシ・ヤゴなどの生物が豊富にみられるためその生態などの学習、マムシやヒルなどの厄介な生物もいるため、その対応なども学習する機会も設けている。さらに田んぼ周辺に多くみられる植物のチガヤについても、古くは蓑として利用された歴史なども紹介している。こうした田んぼ周辺の自然観察も、保護者の中には自らの体験談を回顧し、その情報を子供たちへ伝える方もおり、それによって、子供ならではの視点や観察力をもって多くの楽しみ方を見出す風景もみられる。いずれにしても、日常生活では体験できない学習となっている。最後には、指導者の自家製のふかしたての新じゃがいもやスイカなどの差し入れがふるまわれ、野外で食べる新鮮な旬の地元農産物に舌鼓をうち、子供たちの心の中に多くのコミュニケーションによって育まれる地域で生きる人間像、そして豊かな人間性が培われる様子が垣間見れる瞬間である。

8月の第4回目は、稲の花や受粉観察そしてかかし作りとなる。稲の花の開花は、午前中にみられるもので、普段から田んぼが身近にある方でも改めて稲の花をみるという機会をもたない限り遭遇できないものである。ましてや田んぼが身近でない方にとっては稲に花が咲くということは未知な世界のものである。そして受粉する様子などは神秘的なもので、米が実るシステムを学ぶには絶好の観察会となる。そして、受粉した稲が、実る過程で鳥害に会わないために用いられるものが「かかし」である。現在、様々な鳥害防除の品々が開発されているが、地域の農業に従事している方々は、やはり「かかし」が最も効果があるものと認識している。使い古した衣服や帽子などを各家庭から持参していただき、参加者それぞれのオリジナルかかしを制作している。かかしの中心となる竹を十字に固定し、

そこに肉体のボリューム感をだすために稲藁を結び付ける。そしていよいよ持参した衣服を着させる場面となる。赤ちゃんの衣服、お父さんの野球のユニホームなど持参した様々の衣服が着させられていき、頭部には木綿のさらし布がまかれ、思い思いの表情が極太マジックで描かれていく。へのへのもへじが記されるかかし、アニメ風の表情が描かれたかかしなど個性あふれるかかしが次々に制作されていく。そして出来上がり次第、田んぼに運ばれ、立てられ、最後にはかかしと制作者家族との記念撮影で終了する。この時期は、果物の梨が実る時期でもあるので、市内の梨生産者から規格外の梨が大量に差し入れされ、食しながら親子で本日制作したかかしや田んぼの生育状況などの話で盛り上がり、さらに米作り指導者による童謡「一本足のかかし」のハーモニカ演奏などがあり、非常に楽しい時間を過ごすことができています。

9月の初旬に行われる第5回目は、待ちに待った稲刈りとなる。稲刈りでは、親子共々にノコギリ鎌を手渡し、使用していただくのであるが、指導者から扱いはもちろん、使用する際の精神、邪念をもって使用すれば怪我をする事が話される。さらに、刈った稲を束にしてまとめる際の結束（りっつおー）の作り方が指導される。結束はできない方が多いので、縄をなう方法からレクチャーされ、その応用で結束が作り上げられていく。その結束をもって、いよいよ稲刈りとなる。稲刈り後に稲束は、オダにかけて天日干しをするので、かけやすいように交互に十字の形で結束を使って稲束にしていく。結束はほどけにくく、解きやすいように結ぶコツがある。そうした農業に従事する方の工夫もコミュニケーションの中で理解し、習得していただいている。稲刈りの場合、どうしても稲穂がこぼれ、田んぼのいたるところに落穂がみられるが、やはり参加者は自らが育てた稲穂には愛着があり、もったいない精神で落穂

拾いが実施され、子供たちも米粒を大切にする意識が芽生えていることを改めて感じるひと時となる。

同じく9月中に実施する第6回目は、脱穀・選別となる。脱穀・選別作業に関しては、第2回目の際の農具学習の実践となり、脱穀は足踏み脱穀機と千歯こき、選別は唐箕と箆・篩・箕などを使用している。作業にあたっては、改めて指導者から道具の使用方法、注意すべき点などの話があり、親子共に初体験の農具を使用した作業に夢中になっていく。足踏み脱穀機は、当地域では「ガーコン」と呼ばれるが、その名の由来や指導者が子供時代に手伝いをする中で使用した思い出などが逐次あり、今では博物館資料ともなる足踏み脱穀機を実際使われた方の体験談には親子共々耳を傾け、そうした話は少なからず心に響くものとなっていることが子供たちの表情からわかる。また、作業の順番待ちをしながら一つの稲穂にはいくつの粃がついているか数える子、一粒一粒の粃殻を取り除き玄米の様子を確かめ、お米の構造を再確認して友達と話合う風景など子供たちが自主的に観察する姿もみられる。脱穀し残された稲藁は、藁スグリという農具で整えられ、二次利用されるために再び稲束とされるが、こうした作業も見よう見まねで親子共々に作業に参加し、自然と参加者による流れ作業、分業体制ができていく。こうした作業の一つ一つにも指導者は話を加え、足踏み脱穀機ではとりきれなかった粃を千歯こきで改めて脱穀したり、粃を採った後の稲藁の大切さ、いわゆる米粒と残された藁をも大切にする精神などが伝授されている。唐箕では、風力を利用し比重の差により分別されるしくみを学び、先人の知恵と工夫に親子共々驚いている。一方の原始的な箆・篩・箕を使用した選別では、同様に育て上げた米粒でも様々な大きさや実の入り具合があり、それらを箕で粃それぞれの重さを利用して未熟米・成熟米・粃殻に分類し、その

後に目の大きさが違う筈・篩でさらにそれらを分類する。米作りには、「一粒百行」の熟語のごとく100ほどの作業工程があるとされるが、こうした作業を親子共々行い、毎日食卓にのぼるご飯について考える機会となることは大変意義深いものと感じるのである。

10月に実施される第7回目は、収穫した古代米の試食会となる。参加者とお世話になった方々に加え、試食会を彩る当市特性の梅干し・地元産の野菜を使用した漬物・霞ヶ浦名産の佃煮各種を提供して下さった生産者の皆様と大勢100名にも及ぶ試食会である。試食会のメニューは、古代米おにぎりに古代米餅、梅干し・漬物・佃煮に豚汁で、料理・餅つき・盛り付け・配膳・後片付け、そして食事場所でのテーブル・椅子ならべ・片づけなどすべて参加者を含め全員で行う。まず、参加者を大きく2グループ（料理・盛り付けグループと食事場所の準備と餅つきグループ）に分け、それぞれの役割分担を決めていただくが、多くの方々の指導や協力の中で親子で料理をしたり、餅つきをする作業を通し、親子の絆を確かめ合ったり、生活の基礎的な知識や技術を教育・学習する機会となっている。豚汁を作るという工程の中でも野菜の切り方、食材を入れる順序、味付けの具合など各家庭様々な様相もあり、参加者それぞれが協力し合う中に子供たちもお手伝いをしながら料理法を学習している。食事の用意が整うと、いよいよ試食会となる。大きな声で「いただきます」の大合唱の後に食事となるが、一年間通じ親子でつくりあげた米のおいしさに感動する瞬間である。

その後、一年間の古代米づくり教室の中で観察ファイルに綴った子供たち自らの、食事に対する姿勢が垣間見える感想文発表となる。感想文には、米作りを行う中で自らが感じた事、考えた事など子供たちならではの米作りで学んだ様々な成果がまとめられている。

以下、その一例を紹介しよう。小学校5年生の女子のものである。「私はこの「古代米づくり教室」に参加して楽しかったことや、はじめて知って、びっくりしたことがたくさんあります。私の中でも強く印象に残っていることが3つあります。一つ目は、田植えです。最初に足を入れたときは、足が地面にすいこまれていく感じでズボツと入ったので少しびっくりしてしまいました。始めは、ころびそうになりながらやっていたのですが、だんだん慣れてくると、友達と競争しながらやりました。競争しているときに、いっしょにやっていた先生の方がたに「じょうずだね」といってただけで、すごくうれしかったです。今は機械化が進み、あまりできないきちょうな体験ができて、すごく楽しかったです。二つ目は、田植えから1か月ほどたったときに田んぼを見に来たときの事です。そのときに見てびっくりしたことは、稲のくき2、3本だったところから、10本以上に増えていたことです。（あれ？増えてる！）とびっくりしました。（これからもっと大きくなるんだ！どのくらいの大きさになるのかな？）とわくわくしました。あと、カエルやちょう、かたむむりなどもたくさんいました。最後の三つ目は稲刈りです。今年は稲刈りの前の日に雨がふったので、土が田植えのときのようにやわらかく、刈っている時に足が土にはまってころびそうになったりして大変でしたが、いっぱい稲を刈ることができました。また、稲をほして、次の週に行っただっこも昔の道具を使ったので、見たことのない道具がたくさんあり、その道具を実際に使ってみて、おもしろい道具だな、昔ってこんなに大変な作業をしていたんだなと感心しました。私は、今年たくさん楽しくきちょうな体験ができました。また来年も古代米教室に参加したいです。」子供は、今まで経験したことがない状況に驚きと共に興味を抱かせ、自らの好奇心でどんどん進んで行動していく。この感想文

を書いた児童も教室での体験から、様々な田んぼの環境や作業に関心を寄せていく様子が窺え、先人の苦労があって現在の米作りにつながっていることを認識したようである。

以上、市町村博物館が行う子供教育の事例として、かすみがうら市郷土資料館が実施する「親子古代米づくり教室」を紹介した。稲作を通じて学び得る食の大切さ、田んぼ周辺の自然環境、親子の絆、他校の年齢を越えた友達関係、地域の人々のコミュニケーションについてお分かりいただけたのではないかと思われる。

5. おわりに

子供は、生まれながらの素養もあるようであるが、発達する段階においての環境や遭遇する人々、多様な場面や機会によって、その発達の方向や進展の度合いに差異が生まれるものと感じる。そのため、発達に大きな影響を与え始める小学生の時期に、学校教育以外の特に生活に直結する、いわば「生きる力」となる教育を受けることは大変意義深いものとする。「生きる力」とは、日常生活の中での人間力（より良い思考力・行動力など）による生き方、つまりは個々の人間同士が協力し合い、より良い社会をつくり発展させていく力と考える。そうした教育が実施できる場も様々な存在するが、博物館特に地域に根ざす情報が豊富に集積される市町村博物館の役割は大きいものとなる。市町村博物館の生涯学習における有効性は前回紹介しているが、子供教育への役割も重要となる。今回、例示したかすみがうら市郷土資料館「親子古代米づくり教室」は、まさに市町村博物館が集積する情報、地域に根ざす伝統的産業を活かした子供教育の一つで、10年以上に及ぶ教室の内容から人間性形成にかなりの有効性があることを実感している。教室が終了した後、参加者から頂いた手紙を紹介しよう。「この

教室に参加する前までは、落ち着きがなく学校では自ら手を挙げて発表することなどできなかったA君が、古代米づくり教室に参加するようになり、多くの地域の方々と交流したり、違う学校のお友達と楽しんだり、田んぼの豊かな自然環境に触れる中で大きく成長する様子が窺えました。学校では、率先して手を上げるようにもなり、我が子が古代米づくり教室のお蔭でみるみる成長していく様子に感動しました。ありがとうございました。」というものがあつた。親子古代米づくり教室のすばらしさは、親子参加型ということから家庭教育のきっかけや場となること、異世代コミュニケーションからの生まれ育つ地域の教育、日本文化の基盤産業である「米作り」を通じた日本文化への理解、これらから自分が日本人であることと共に日本人として引き継がれてきた人間性を学ぶことができることにある。このように、親子古代米づくり教室の子供教育における有効性は、一定の評価を与えることができるものとする。

筆者は、この事業の最後に「できるかぎり親子で食事をしてください」と結んでいる。食事は、家族の愛情や絆を深める重要な場面であり、家庭を特徴づける味や団欒を通じた思い出など忘れがたいものにもなる。食卓にのぼる米を親子で作る、そして日々のお米を家族で食べる、何気ない食事が話題を豊富にさせ、共通する話題で話が弾む。そんな日常的な事柄ながらも、日々繰り返され、積み重ねられるものであるからこそ、大事にしなければならない人間の働きといえる。また、食は言うまでもなく生きるための重要な働きである。この食に関わることに関し、栽培から料理までの一連の作業を学び、体験することはまさに「生きる力」を育成させるに十分なものとする。日常茶飯事としてその重要性を忘れがちな食ではあるが、この行為に曹洞宗開祖の道元禅師は注目していた。道元が示す『正法眼蔵』には、「おほよそ仏祖の屋裏

には、茶飯これ家常なり」とあるように、人間の日常の行いの大切さや日常にこそ仏法のあることとしている。こうした、何気ない日常の行為である食を栽培からの作業について保護者と共に実施し、収穫した産物を家族で味わう風景こそ日本人の日本文化の姿の一端というべきものではなかろうか。多くの国民が、農業を通じた子供教育についての重要性を再認識すると共に、少しでも多くの子供たちに農業に触れる機会をもっといただくことを切に思い、そうした子供教育のため市町村博物館での教育活動がさらに、活発になっていくことを願いたい。

参考文献

- 1) 玉城 哲 1977『稲作文化と日本人』現代評論社
- 2) 斎藤知正 1983『道元禅と現代』斎藤知正先生退官記念著作刊行会
- 3) 佐藤政孝 1986『人々の学習と社会教育』財団法人日本社会教育連合会
- 4) 森田美比 1988『霞ヶ浦の風土と食』人間選書
- 5) 高階玲治ほか 1996『学校5日制で教育はどう変わるか』教育出版
- 6) 石田一宏 1999『子どもが大人になる』子供の生きる力③ 大月書店
- 7) 文部科学省 2008『小学校学習指導要領』
- 8) 文部科学省 2008『小学校学習指導要領解説 社会科編』
- 9) 千葉隆司 2012「市町村博物館の時代－真の日本人と地域コミュニティ再生への重要拠点－」『筑波学院大学紀要』第7集 筑波学院大学
- 10) 小笠原喜康 並木美砂子 矢島國雄編『博物館教育論』ぎょうせい
- 11) 千葉隆司 2013「市町村博物館と生涯教育－地域社会からの人づくり－」『筑波学院大学紀要』第8集 筑波学院大学
- 12) 日本博物館協会編 2013『子どもとミュージアム 学校で使えるミュージアム活用ガイド』ぎょうせい